

ほうほうのていといった思いで寺から逃げ出して来た私は、心の動揺を静めながら、もう何往復したのか思い出せない塔公の道を歩いていると、道端でこぢんまりと屋台を出している串焼き屋が目に入った。そういえばソロソロお腹がすく時刻であった事を思い出し、そっと焼き台の前のベンチに腰かけると、チベット服姿の小柄な若女将が感じの良い笑顔を見せて私を迎えてくれた。

いつものように大好物の水牛肉の串焼きを指さして目の前で焼いて貰ったそれは、これまで各地で食べてきた串焼きの中でも一番美味しいと思える味だ。この四川省という土地の人の好みだと思われる味付けは、得てして日本人の私には塩辛すぎる事が多かったのだが、この若い女主人の焼いてくれた串焼きは塩加減も味付けも程よく、肉が新鮮なのか柔らかくてとても美味しかった。

今朝、あそこで買って来たのかな?・・・思わず、朝の塔公の町を散歩して見かけていた肉屋の様子を思い浮かべた。正確に言えばそれは店ではなく、その日の朝つぶして皮を剥ぎ、お腹を捌いただけといった感じの大きな肉の塊を、道路脇の屋根の軒先から吊るして、その場でお客の必要に応じ吊るした肉塊から肉を切り分けて売っている様子に、きっと冷蔵庫など持たない人々がその日に使う分の肉だけを、こうして買っているのではないだろうか興味深く眺めていたのだった。

数本の串焼きを食べ終わると席を立った私は、この後何をするかの当ても無く、ブラブラと塔公の町を散歩した。パスポートに残されたビサの期限は既に残り1週間を切っている。もうこの小さな町でこれ以上やる事も思いつかなかった。

人気の無い町はずれの丘に登り、既に深い愛着を感じている町の様子を眺めながら、明日の朝この町を離れる気持ちを固めた。別れを惜しむような気持ちで青空を背景に町の頭上を横切るタルチョや、祈祷旗をはためかせた神山を従える町の風景を目に焼き付けると、元来た道を折り返し再び先ほど後にした塔公寺の方向に向かった。今日を最後の日にすると決めたことで、最後に改めてゆっくりと町の端から端までを歩きたいと思っての事だ。

すると先ほど私が串焼きを食べた屋台の前を通り

過ぎた時、ハーイ!と手を振りながら、突然小さな少女が飛び出して来ると「何処にいくの?」と私と共に歩き出した。

「え?」

歳の頃は7、8歳位に見える可愛らしい少女の顔には見覚えが無かった。塔公にやってきてからの事を忙しく頭の中で思い巡らせてみても、この少女と出会った記憶は思い出せない。何かの客引き?それとも物売り?インド辺りに行けばしょっちゅう出会う事となる、まだ幼い子供の商売人達を一瞬思い浮かべてしまったが、この塔公はそこまで観光擦れした土地ではないだろう。

キツネにつままれたような気持ちだったが、そんな事はどうでも良かった。子供と遊ぶのは大好きだし、一人で過ごしていた孤独な時間を共に過ごしてくれる仲間が現れたのは大歓迎だ。

「ねえ、何処にいくの?」

私の後をついて歩きながら、少女は再び訪ねた。

「あっちの方よ」

元々、どこに行くかの当てなどなかった。適当に前方を指さすと、「一緒に行こうよ」と少女の手を取り、二人でならんで仲良く歩き出した。

午前中を過ごした塔公寺を脇に回ると、何やら小さな門があり、中からカンカンカンカン・・・という不思議な音が響いていた。土地の少女と一緒にすることで気が大きくなっている私は興味を惹かれるままにその扉の中に入り込むと、そこでは大勢の少年工達が宗教的な模様やお経の言葉を、薄い金属の板に打ち込む作業をしているのだった。ああ、ここでも!・・・

その日の朝、私は朝の散歩で、塔公の町はずれにある巨大なマニ塚を見に行っていた。マニ塚とは、このチベット高原一帯の何処にいても目にする、マニ石と呼ばれるチベット仏教の経典が刻み込まれた石版が、積み重ねられ塚になっているものだ。

成都の宿で知り合った日本人が持っていたガイドブックに、ごく簡単にふれられていた塔公の見どころとして、そのマニ塚が紹介されていた。初日にそれを見に行こうと宿を出たのが全く違う方向に突き進んでしまい、それきりになっていたのを、この日の朝散歩で訪れてみたのだ。いったい何枚のマニ石が重ねられ

ているのか想像もつかない巨大なマニ塚が、いつから誰の手によってここに存在しているのか興味深かったが、それよりも強く私の興味を引いていたのは、マニ塚の脇の小道を挟んだ向かい側の敷地からコツコツコツ・・・と響いてくる不思議な音だった。

周りをシートで囲われており、中で何が行われているのか解らなかったが、人一倍好奇心旺盛な私はよそ者である立場も忘れ、シートの間隙の入り口をめくって中に侵入してみると、そこでは工事現場で使われるようなビニールシートで仕切られたテントハウスのそれぞれの個室で、数名の少年石工達が一心にマニ石を刻んでおり、外に響いていた不思議な音はそこから漏れていたのだった。

石工達は畳半畳ほどの石版を前にして、見本の仏教経典を広げ、刻んでいる文章の列を見失わないように経典の上に物差しを当て、それを少づつずらしながら、同じ文章を石版に刻んでいた。手慣れた様子で器用にノミと金づちを使い、まるで手で描いているようなスピードで、どんどん美しいお経の文字が石版に刻み込まれている。

その鮮やかな職人技には思わず目を奪われたが、その場にいる石工の殆どがまだ10代と見られる少年工で、服装などはいかにも今時の少年といったいでたちだ。中にはガムを噛んだり、ラジカセで流行りの音楽をかけながら作業している者もいて、マニ石といえば高僧が自身の仏教的な想いを一文字一文字魂を込め、厳粛な雰囲気の中で刻まれているようなイメージを漠然と抱いていた私としては、このあまりにドライで職業的な雰囲気に少なからず拍子抜けするような思いも感じたのだった。

少年工達の作業場となっているテントハウスの奥には布団や漫画、食料などが置かれているのをみると、この場所は彼らの住居兼作業場であるらしい。少年達はここに暮らしながら、朝から夜までこうして一日中、石版にお経の文字を刻み込んでいるのだろう。石に刻まれた文字はどれも美しいが製作者によって筆跡が違い、それぞれに個性があるのが面白かった。

ここでこうして制作されたマニ石は、更にあの巨大なマニ塚の上に積まれるのだろうか？ それとも余所の土地に運ばれるのか？ どう見ても仏教的な雰囲気とは程遠い感じで少年達に作られたマニ石は、どこかに安置される前に僧侶が経を唱えて魂を込めたりするのだろうか？

私はこの年頃の少年に出会った時のいつもの癖で、

亜丁の少年の事を思った。同じ年頃の少年がこうして狭い世界の中で、単調な毎日を送りながら暮らしている事を思えば、やはり外の世界に飛び出して自由を謳歌しているように思える彼は、本当に恵まれた幸せ者なんだろう。

ここで働いている少年達はこれからどんな人生を暮らし、どんな大人になっていくのだろうか。日本にいれば他者の人生に思いを馳せる事など殆ど無いが、この土地にいと誰かに出会う度にそれを思わずにはいられなかった。

・・・ちょうどこの日の朝、そんな光景を眺めてきた同じ日の午後、またしても同じように仏教的な装飾品を加工する少年工の作業場に迷いこんでしまったのだ。朝のマニ石制作現場といい、塔公寺の僧の個室といい、日ごろ何も考えずに有難く拝んでいたお寺の舞台裏が垣間見られる貴重な一日だ。

少年工達は手慣れた仕草で金属板に型を当て、金づちで型の模様を打ち込みながら素早く金属板の装飾を完成させていく。完成したものはきっと寺院の柱や梁にはられて寺の飾りに使われたりするのだろう。興味をひかれて作業台の前まで行き、じっと作業を見ている私達に少年工が笑顔を見せた。

「何処から来たの？」

「日本から」

そう答えながら、年若い少年がこうして働いているというのに、毎日気の向くままブラブラと遊んでいる自分が少し恥ずかしく思えた。これらの作業は興味深くもっと見ていたかった気もしたが、こんな光景は特に珍しくもないのであろう少女に「もう行こうよ」と手を引かれた事もあり、彼らの仕事の邪魔をしているのに気がひけた事もあってその場を離れ、再び少女と歩きだした。

特に行く当てもない私たちは、塔公寺の周囲を囲う塀に設えられたマニ車を二人で走って回しながら競争して歩き、グルッと回って元の寺の正面に戻った時には、既に先ほど出会ったばかりと思えないくらい、すっかり仲良しになっていた。

その後は、肌寒くなる夕暮れ時に備えて私の宿の部屋に上着を取りに戻り、しばらくそこで一緒に過ごしたり、町の街頭映画館を冷やかしたりした。

街頭映画館とは、私が勝手に命名した名前だが、成都にいた時からあちこちの町でよく見かけていた。入り口から中にはいと真っ暗な部屋の正面に大型のテ

レビが置かれ、映画のビデオが流されているのを、中に置かれたベンチに腰掛け見る事ができるようになっている店(?)だ。恐らく家にテレビやビデオを持たない人間が遊びにくるのでは?と思われ、こんな海外の下町文化には非常に興味を惹かれてしまう私なのだが、何しろ料金やシステムがどうなっているのか解らずに、地元の間がひしめき合っている暗い部屋の中に入るのがためらわれ、これまで足を踏み入れた事がなかった。

それが思いがけずこの日初めて、少女に手を引かれるままに侵入することができたのはちょっと嬉しく、ドキドキしながら二人で並んでベンチに腰掛け、しばらくテレビの画面に流れる映画を眺めていたのだが、特に誰かが料金を徴収しにくる訳でもなく、どうすればいいのか考えているうちに再び少女に手を引かれて外に出てしまったので、結局この手の店の謎は解明する事が出来ずじまいだった。

道端の雑貨屋で駄菓子を買って再び元の串焼き屋に戻ると、少女の母親である女主人は心配していたらしく、何処に行ってたかと少女を諷めている様子だったが、娘からこの人に買ってもらったと差し出された駄菓子を見ると、私に笑顔でお礼を言った。

結局、彼女が私に声をかけてきたのは、先ほど母親の店で串焼きを食べた人間の顔を覚えていたという以外の理由はなかったらしい。外人観光客も数多く訪れるこの土地で育った少女は他国の旅行者に接する事にも慣れてきているのだろう。

その後はそのまま串焼き屋台のベンチに腰掛け、少女の母親が焼いてくれる美味しい串焼きを食べながら、そこで談笑して過ごした。少女には小さな弟がいて、やっと歩けるようになったばかりといった年頃のその子は、ずいぶんやんちゃな少年だ。テレビで見る中国剣劇を真似て、何やらセリフを呟きながら剣に見立てた串焼きの串で、一人で勇ましく敵と立回るのに夢中になっている様子を見ると、心意気は既に一人前の男になりきっている感じだ。たまたまその場を通りかかった西洋人観光客の前に走り出て、焼き串を観光客に向け相手を睨みながら、決めのポーズをとる姿には、この歳にして男気とユーモアが溢れていて私はいっぺんに彼のファンになってしまった。

いきなり小さな少年に道を塞がれ、焼き串をつきつけられて困った西洋人は大げさに降参の仕草をしてみせ、何とか道を通行することを許されていたが、少年剣士はその後も一人で敵との戦いを繰り広げていた。あまりの可愛さに手を伸ばして抱き上げようとして

も、私の手を振り払ってそれを拒み、「俺に構うな!」といった雰囲気だ。

まだ赤ちゃんと呼んでもいいほどの幼い年齢にも関わらず、人に抱き上げられる事や、危険から守ろうと大人の保護の手が伸びることを好まない、自立心とプライドが高いこの少年には、既に誇り高き男の片鱗が感じられ、思わず理塘の草原のテントで出会った遊牧民家族の少年の面影と重なった。

やはりチベットの男たちは、生まれながらにしてみんな誇り高い戦士なのだ。ふやけた昨今の日本男子たちに爪の垢でも飲ませてやりたいものだ。

そんなことをして過ごしている合間にも串焼き屋台には次々とお客が現れ、少女は健気に母の手伝いをしようとするが、母親には逆に邪魔なようで、遊びじゃないんだからお前は手を出さなと制していたのを、聞かない娘が無理に手を伸ばし、勢い余って焼き台に倒れ掛かかって、数本の串焼きが地面に散らばってしまった。

お客が焼けるのを待っていた商品が駄目になってしまい、仕事の邪魔をされて怒った母親が娘を叩いて叱りつけ、少女がその場で泣き出してしまうと、それまで一人で遊んでいた少年剣士は泣いている姉の元にやってきて慰めるそぶりを見せ、俺がカタキを取ってやるぞといった仕草で母親を殴る真似をして見た。握りこぶしに息を吹きかけ、母に向かっておどけながら怒った表情まで作ってみせるその仕草に、みんなが笑ってその場はすぐに収まったのだが、私は少年の頭の良さにビックリだ。

きっとそんな仕草もテレビでみた映画の真似なのだろうが、まだ3歳にも満たない年齢だというのに姉を思いやる気持ちや、この機転とユーモアはどうだろう。この子は素晴らしく明晰な頭脳の持ち主なんじゃないだろうか? 将来どんな素晴らしい男性に成長するのか楽しみだ。いつかそんな彼の成長ぶりを見届けに、再びこの塔公に訪れたい。

先ほどは怒っていた母親も娘を抱き寄せてもう悪戯は駄目よと諭すと、今泣いたカラスがもう笑った少女は、直ぐにすっかり機嫌を直して大人しく私の隣に座った。

そんな彼女の肩を抱きながら徐々に暮れていく塔公の街並みの中、これまで孤独に過ごしてきたこの町で、最後の日に初めて感じられた町の人との触れ合いの暖かさに、私は幸せな満足感でいっぱいだった。

(続く)